

DTM 基礎② (コード)

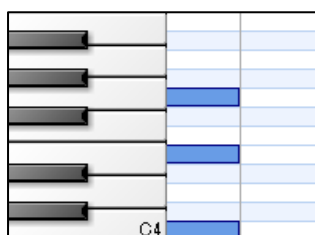
■コード

楽曲は、通常、メロディ、ハーモニー、リズムの三要素によって成立する。コードの理論は、このうちの主にハーモニーにあたり、ハーモニーの要素を深く掘り下げたものと考えて間違いはなく、この理論はほかの二要素とも密接にかかわっており、音楽の仕組みを理解するうえで、コード理論は強力なツールの一つとなる。

1. コードのしくみ

コードというのは二つ以上の音を一度に鳴らした状態のことで、和音ともいう。

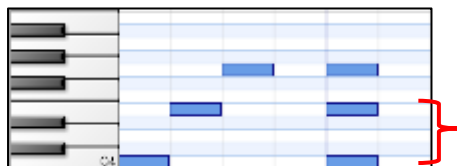
まず、3度ずつ音を重ねた3音からなるコード（トライアド）から始める。



C音を基準にしたものを例にする。3度ずつ音を重ねるので、E音とG音を重ねる。コードを構成している音には名前がついており、低いほうから根音 (Root, ルート)、第3音 (3rd)、第5音 (5th) という。なおコードは構成している音の並び順が変わっても、かまわないという決まりがある。

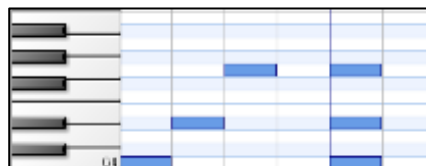
また、コードにもメジャー・コード (明るい響き) とマイナー・コード (寂しい響き) があり、それぞれ次のような特徴がある。

Cメジャーコード



長3度

Cマイナーコード



短3度

上図のように、ルートと第3音の間が、長になるものはメジャー・コード、短になるものはマイナー・コードということになる。

コードの名前のことをコード・ネームと言い、次のような意味がある。;

Cメジャーコード

C

根音のみの表記

Cマイナーコード

Cm

マイナー・コードの意味

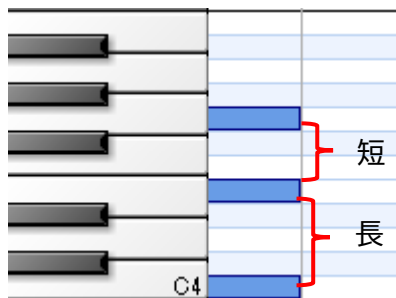
Cマイナー・セブンス・コード

Cm7

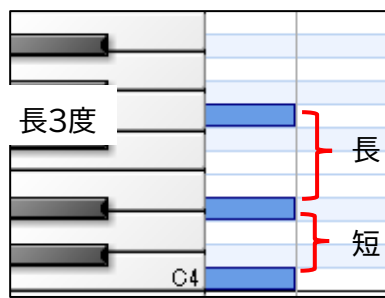
Cmコードに7番目の音をつける
よって、このコードは3音+1音の
4音からなるコードになる。

● 3 音からなるもの (Triad)

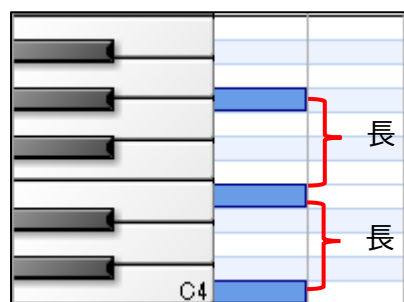
C: C メジャーコード



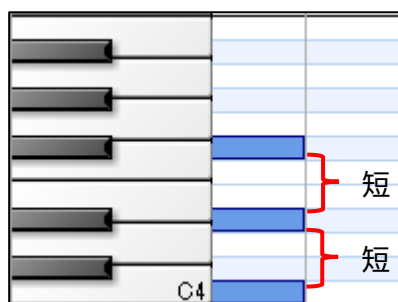
Cm: C マイナーコード



Caug: C オグメント・コード

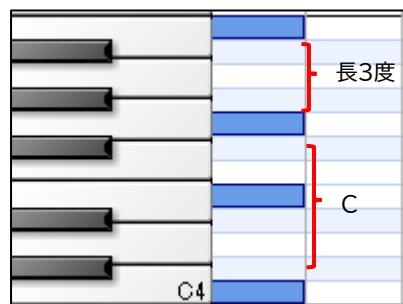


Cdim: C ディミニッシュ・コード

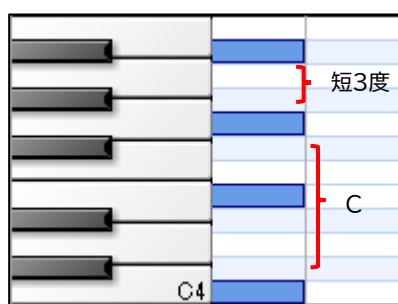


● 4 音からなるもの (7th Type)

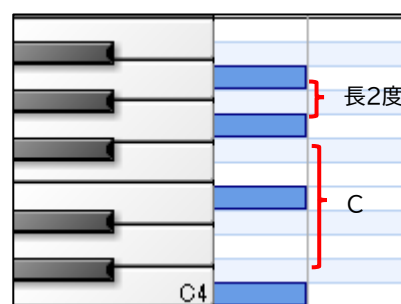
CM7: C メジャー・セブンス・コード



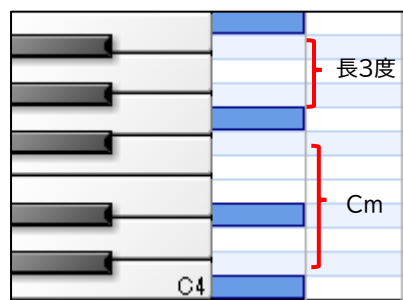
C7: C セブンス・コード



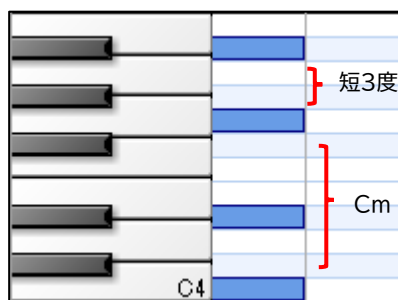
C6: C シックス・コード



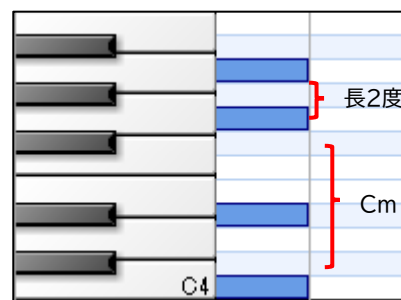
CmM7: C マイナー・メジャー・セブンス・コード



Cm7: C マイナー・セブンス・コード



Cm6: C マイナー・シックス・コード

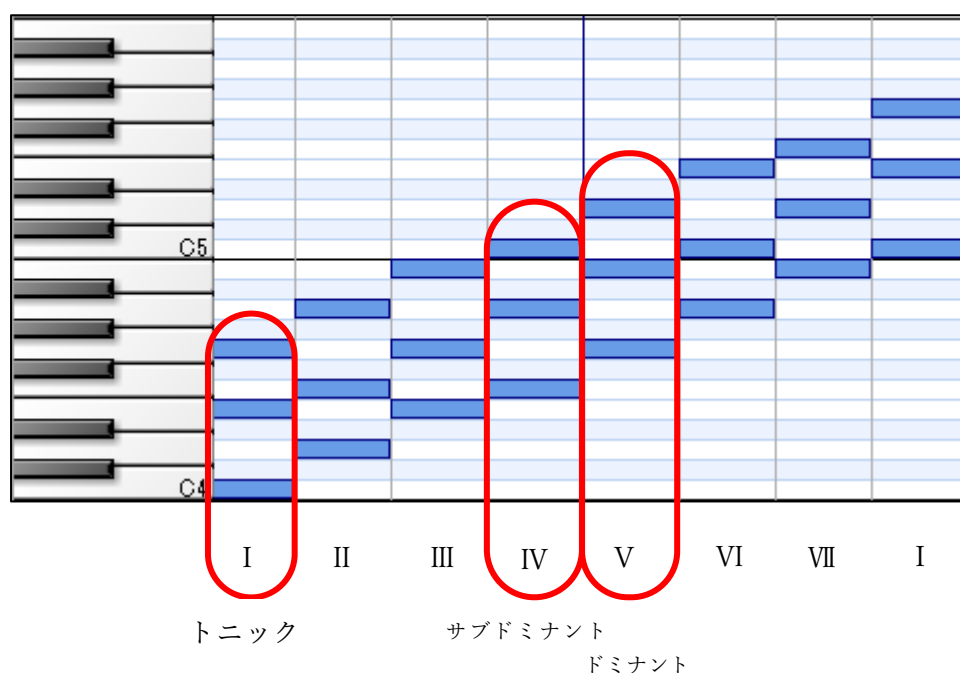


※シックス・コードは、第5音から長2度のみ付けられ、短2度がつくことはない。

コード進行について

①ダイアトニック・コード

下図の例はダイアトニック・コード (Diatonic Chord) と言われ、あるスケールの上に三和音を作ったものである。初めのコードはトニック、4番目と5マン目は、それぞれ、サブドミナント (Subdominant)・コード、ドミナント (Dominant)・コードと呼ばれている。これらは、主要三和音と呼ばれる。



②主要三和音

・T・・・トニック

ダイアトニック・コードの I の和音を指す。よって、そのコードのキーを意味する

・D・・・ドミナント

ダイアトニック・コードの V の和音を指す。このコードからトニックに進行したときに極めて安定した響きを感じられ、落ち着く。そのかわりに平凡な感じがして、野暮ったいようにも聞こえる。

・SD・・・サブドミナント

ダイアトニック・コードのIVの和音を指す。このコードからトニックに進行したときにドミナントより安定感には欠けるが、おしゃれな響きを持つ。文字通り、ドミナントのサブの役目で使われる。

3. コード進行法

①基本的なコード進行

基本的にこれを守れば違和感なくコード進行ができる。という項目を次にあげる。

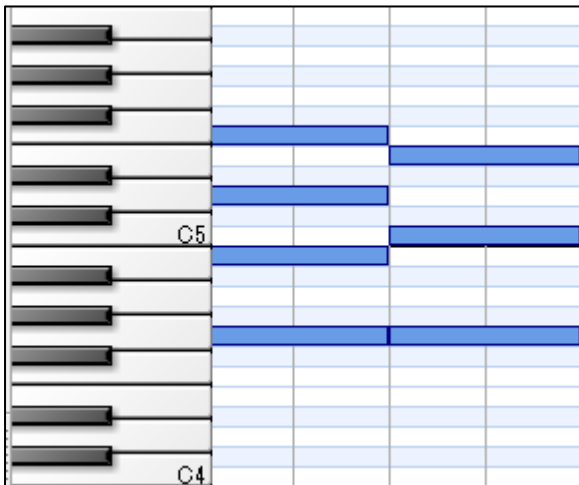
- a) I (トニック) はどんなコードに進んでもよい。
- b) IIはV (ドミナント) にのみ進む
- c) IV (サブドミナント) はVI以外のコードに進む
- d) V (ドミナント) はI (トニック) とVIにのみ進む。
- e) VIはI (トニック) 以外のコードも進む。

以上の決まりに沿ってコードを並べていくと、違和感なく安心してコードが進んでいく。ポピュラー音楽ではこれにぴったりあてはまらないものもあるが、基本的にはこの決まりを守っている。

②ドミナント 7th の進行、ドミナント・モーション

ドミナント 7th はエッセンスとして曲の中では非常によく使われる。それはドミナントの安定感とサブドミナントのおしゃれさを併せ持つからである。しかし、ドミナントよりもドミナント 7th のほうが不安定な感じがするため、安定感を得るために、V7 は I に進行する。これをドミナント・モーションという。

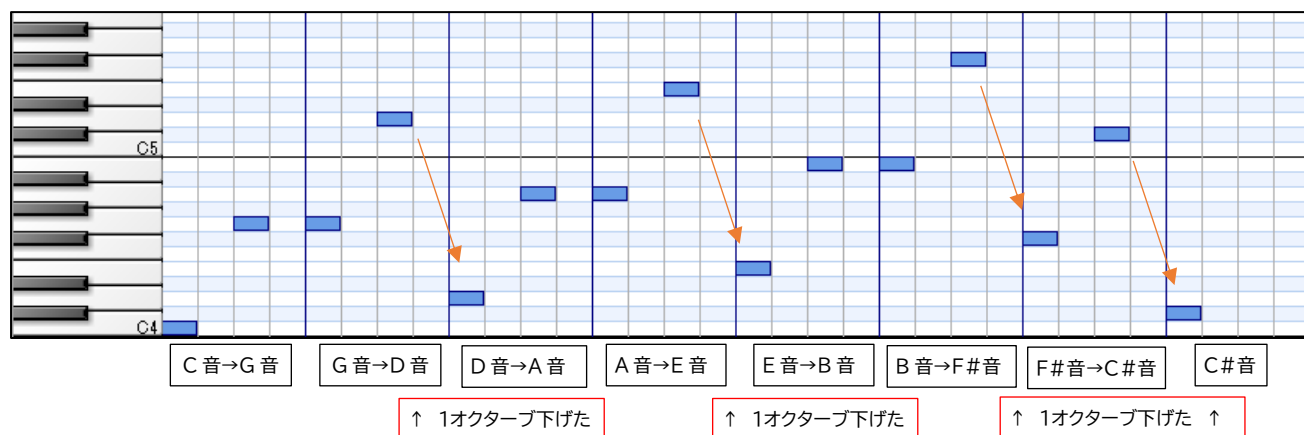
C メジャースケールの例



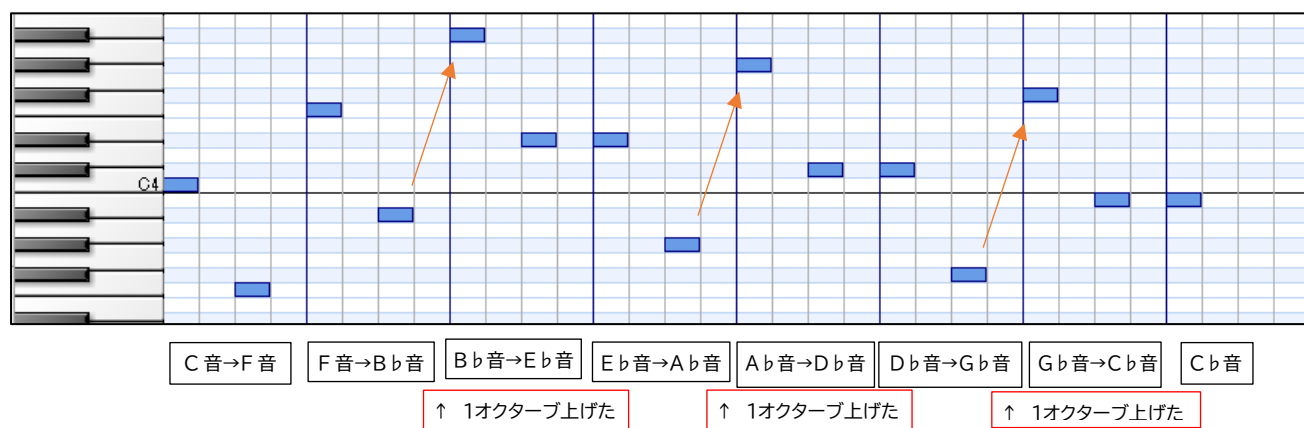
G7 → C
V7 → I

③五度圏

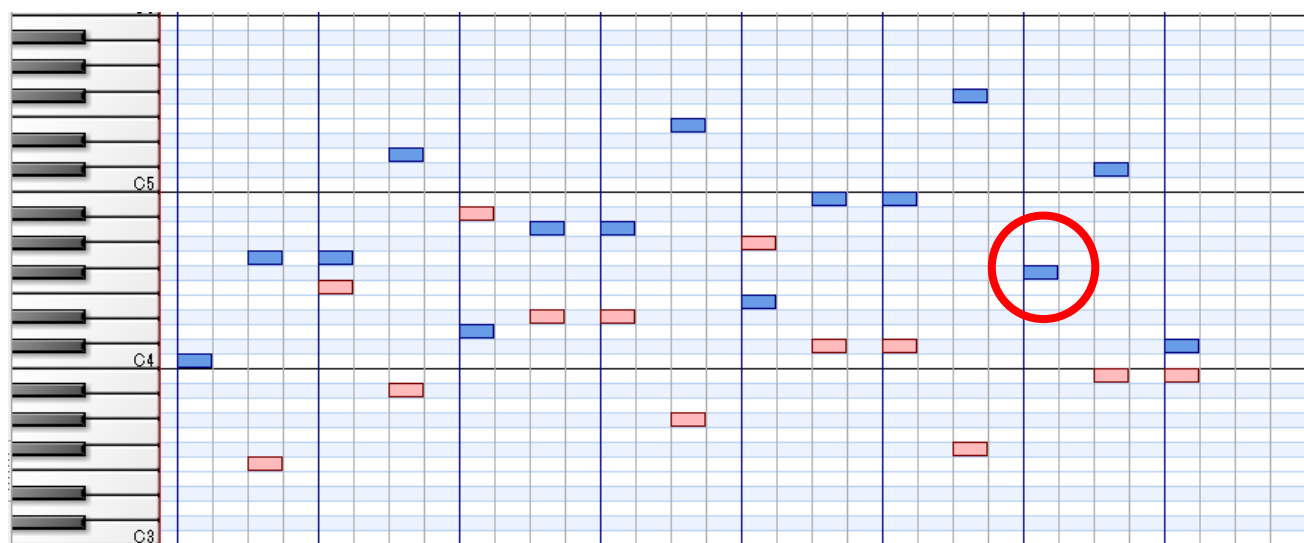
音楽理論上でたいへん意味のあることがらなので、ここで説明する。まず、Cコードのルートを完全5度（全音3つ+半音1つ。半音7つ分。例 C→G）ずつ上に進行させる。



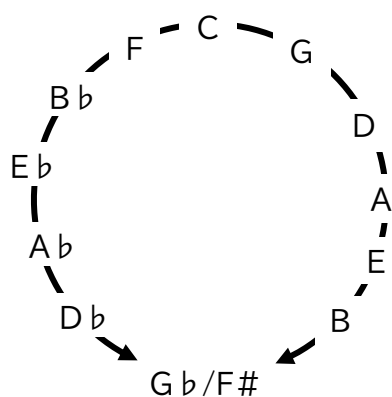
次に、完全5度ずつ下に進行させる



F#とGbは同じ音なので、完全5度ずつ5回上げたときと5回下げた時は同じ音になる。



まとめると、数のようになり、これを五度圏または、サークル・オブ・フィフスと呼ぶ。



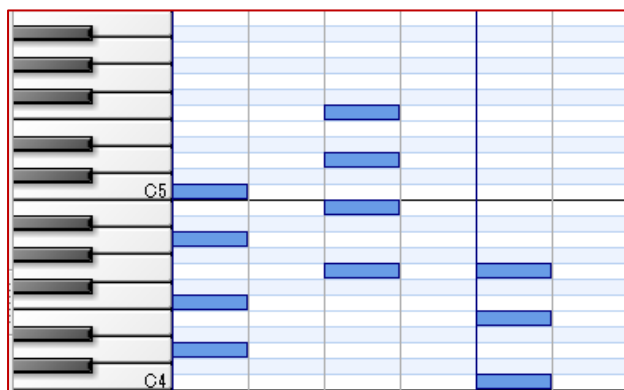
この並び方は、メジャースケールの調合のつく順番と一致しており、さらに、五度圏の中のある音をルートとし、V7のコードを作って、左となりの音をルートとしたコードに進めば、必然的にドミナント・モーションが生まれる。五度圏はさまざまな音楽理論に深くかかわっていて、理解するための鍵になる。

④ トゥー・ファイブ

次にII m7 → V7の進行について説明する。これもドミナント・モーションと同様、曲の中でよく使われる進行で、一般にトゥー・ファイヴと呼ばれる。

トゥー・ファイブ ドミナント・モーション

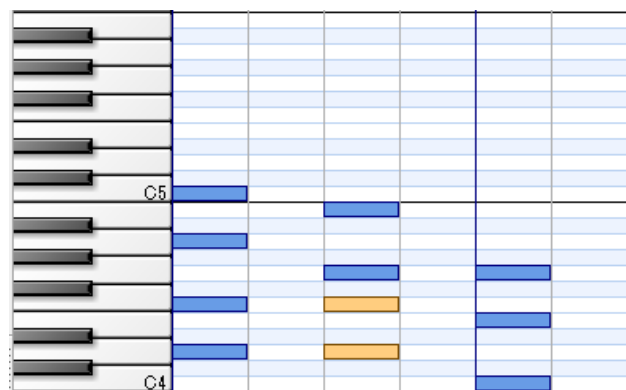
Dm7 G7 C



II m7 V7 I

サブドミナントの音 ドミナントの音 トニック

(Fコードが含まれる) (Gコードが含まれる) (C) → 主要三和音

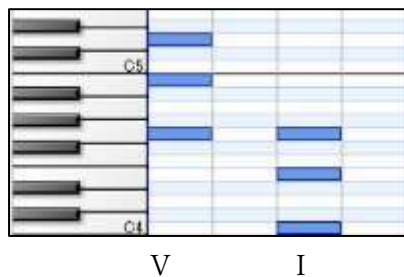


このように、トゥー・ファイヴの進行にドミナント・モーションを続けると、安定した進行になる。これはトゥーファイヴのそれぞれのコードの音にサブドミナントと、ドミナントの音が含まれており、3つは主要三和音にあたるからである。

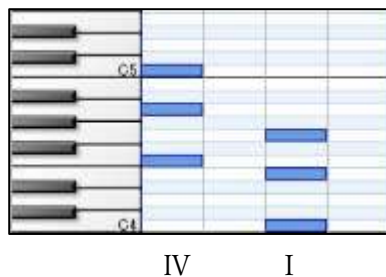
⑤終止形（ケイデンス（英語：Cadence 一般的な表現）、カデンツ（ドイツ語：Kadenz 伝統的な表現））

V → I の進行を全終止といい、IV → I の進行を変終止と言う。全終止は安定していて、変終止は安定感に欠ける。

a) 全終止 G C

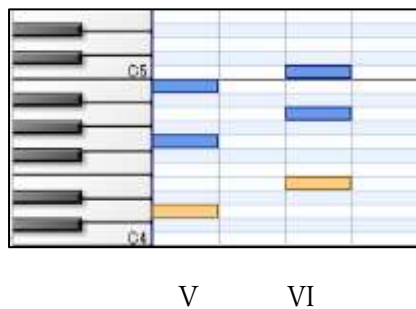


b) 変終止 F C



また、トニック以外で終わる終止形を偽終止という。これは曲の最後ではなく、曲の途中で色を付けるときに使う。

G Am

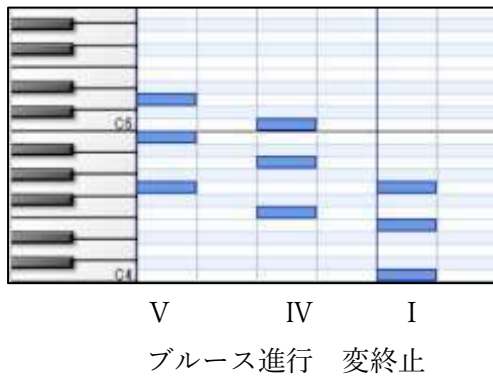


これは一旦落ち着いた感じになるが、この先に何かありそうな特殊な終止形である。

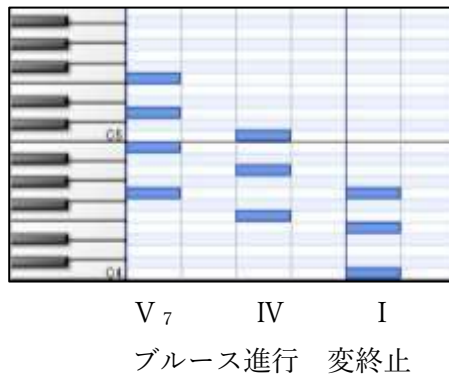
⑥ブルース進行

ブルースは基本的な進行に従わずに成り立っている。

G F C



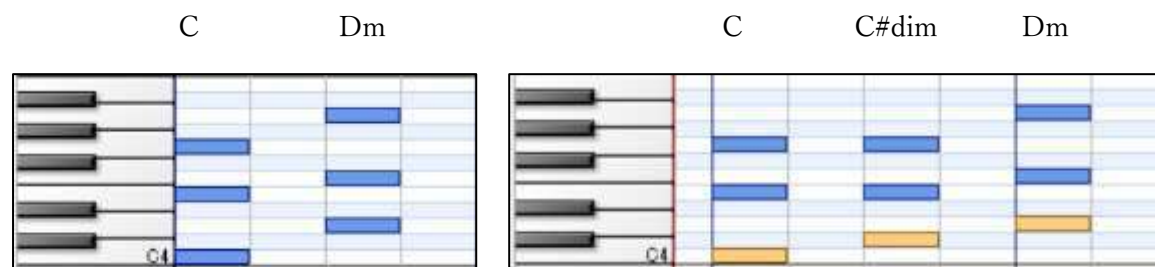
G7 F C



V のコードは I か IV のコードにしか進まないという基本的な進行に反して V → IV と進行しており、最後も安定感に欠ける変終止で終わっている。これがブルースの特徴である。である。

⑦ディミニッシュ・コードの使い方

ディミニッシュ・コードは I → II、IV → V のように長 2 度で上行する進行の時に、間にはさむと聴きやすくなるというものである。



右の図のように間に挟むと、ルートの音が半音ずつ上がっていくため、聴きやすくなる。

ここではコード進行について説明したが、コードは奥が深く、それだけで本が 1 冊かけるほどである。まずは①、④などをしっかり理解して、理解を深めていくといいだろう。